

話題の感染症 (人と動物の共通感染症)

重症熱性血小板減少症候群 (SFTS) の現在地～マダニの生態から臨床まで～

「重症熱性血小板減少症候群 (SFTS) の現在地
～マダニの生態から臨床まで～」をはじめるとあたって

日本大学 生物資源科学部 獣医学科

かべ や ひで のり
壁 谷 英 則

Hidenori KABEYA

昨年 (2025 年)、8 月に北海道内で初めて重症熱性血小板減少症候群 (SFTS) の患者「ヒト」が報告されました。2013 年に日本で初めての SFTS 感染事例患者が報告されて以来、これまでに西日本を中心にその発生が確認され、「西日本の感染症」としてとらえられてきましたが、2025 年 7 月には、神奈川県で関東初となる感染者の事例が報告されて、わずか 1 か月後のことでした。2025 年、本症の報告は 191 例と過去最多のペースで報告され、その発生地域も劇的に北上した歴史的な一年となりました。2024 年には、患者と接触した医療従事者において、わが国で初めて「ヒトからヒトへの感染」も報告されています。

2025 年は、関東地方で初めてとなる犬および猫の SFTS 感染が茨城県で確認された年でもあります。2017 年、山口県で体調を崩した野良猫に噛まれた 50 代女性が SFTS を発症後、亡くなった事例は、世界で初めての「哺乳類」から「ヒト」への感染事例として注目され、その後も野生動物のみならず、犬や猫といった、より身近な「動物」が感染源となることが報告されました。実際にそれらを治療した獣医療従事者においても医療行為中に感染したことが報告されており、現在獣医療の現場で最も“身近な”、“致死性の”人獣共通感染症として極めて大きな脅威が現実のものとなりました (表)。

SFTS ウイルスは、野生動物とマダニの間で維持されていることが知られています。従来、日本紅斑熱やツツガムシ病など「ベクター」媒介性の感染症は、里山に人が立ち入り、ベクターの刺咬を受けることでわが国でも発生してきました。現在は、地球温暖化に代表される「環境」の変化によって、多くのベクターが寄生している野生動物が、ヒトの生活圏まで出現するようになり、市街地に住む一般の人たちや犬猫などの伴侶動物にもベクター媒介性感染症が広がりを見せています。

一方、獣医療では、屋外で放牧される牛などの家畜において発生するピロプラズマ症など、農家に大きな経済的影響を及ぼすベクター媒介性の感染症が知られてきました。これまでに、ベクターを対象としたベクター媒介性感染症の対策が試みられており、“ダニワクチン”の試みがその一例として知られています。

今回はミニシリーズとして、2025 年に大きな社会現象となって注目された SFTS の“現在地”を、「ヒト」、「動物」、「環境 (ベクター)」の各側面から理解する One Health アプローチとして企画いたしました。

モダンメディア読者の皆様の“One Health の実践”の一助となると幸いです。本特集の制作にあたり、ご多忙の中、多大なるご協力を賜りました、山中篤志先生 (宮崎県立宮崎病院)、松鶴彩先生 (日本大学)、中尾亮先生 (北海道大学)、田仲哲也先生 (東北大学) に、深く御礼申し上げます。

表 動物の治療等で SFTS ウイルスに感染したことが推定される獣医療従事者の症例

発病年	性別	年代 (診断時)	感染地域 (推定または確定)
2018	女	40 代	九州地方
		20 代	
	男	20 代	四国地方
2019	女	50 代	九州地方
2020	男	30 代	中国地方
2021	男	60 代	中国地方
			四国地方
2022	女	50 代	九州地方
	男	60 代	中国地方
2023	女	30 代	中国地方
2025	男	70 代	中部地方

出典：国立健康危機管理研究機構。感染症情報提供サイト。「感染症発生動向調査で届出られた SFTS 症例の概要」表 3
を基に著者より作成、一部改変

2025 年 7 月 31 日現在